

奥野克巳著

『帝国医療と人類学』

春風社 2006年 229ページ

わきむら こうへい
脇村孝平

本書のタイトルを見て、「『帝国医療』とは、いったい何だろう？」と反応される読者も多いに違いない。また、「『人類学』が、『帝国医療』に何の関係があるのか？」と怪訝に思われる読者も少なくないだろう。

まず、「帝国医療」という言葉についての著者の説明は次のとおりである。「原義としては、帝国医療とは、植民地の経営を守りその存続をはかる重要な統治ツールとして、宗主国によって植民地に導入・実践された近代医療のことである。それは必ずしも近代医療サービスの帝国主義的な諸特徴を指し示す概念ではない」(6ページ)。かつ、それがもともと歴史学上の概念であることを示唆する。しかしながら、池田(2003)の所論に依拠しつつ、以下のようにも述べる。「それは、分析的な想像力として、近代医療の特質を剔抉するために用意された概念であり、近代医療が抱える英雄主義や万能主義を中和し、グローバル化する近代医療のありようを照らし出すものである」(6ページ)と。さらに、「その用語の射程には、コロニアルな時代に行われた近代医療だけでなく、ポストコロニアルな時代の国際保健医療を含む、近代医療の世界拡張のありようが入る」(7ページ)という。このように、歴史的概念を転じて、現代にもその射程を広げる意図が語られている。

続いて、このような概念が人類学とどのような関わりをもつのであろうか。著者の問題意識は、本書の「はじめに」の部分よりも、むしろ「おわりに」の部分で詳しく示されている。「人類学と近代医療

という2つの学問と実践は、植民地列強が領土獲得をめぐって競い合った時代、他の領域からぬきんで近い距離まで、非ヨーロッパの人びと(の身体)に接近したという共通点をもっている。しかし、同一対象に向き合ったはずの人類学者と医師は、植民地において交わることはなかった。人類学者は、医師や近代医療の活動そのものには意を払うことなく、研究対象社会の民族誌的記述へ向かったのである」(182ページ)と述べる。加えて、「民族誌を記述する人類学者は、当該地域への近代医療の導入と配置の歴史的・社会的条件やその背景、制度の特徴や問題点などを含めて、近代医療のダイナミズムに関して、立体的な記述や説明づけを行う必要をほとんど感じなかったのである。とりわけそのような傾向は、シャーマニズムや呪医などの土着の実践に焦点をあてながら、人びとが病氣やけがにどう対処するのかを問題にする人類学の研究において、顕著に見られる」(184ページ)と指摘されている。実は、この発言は著者自らの研究にも向けられている。奥野氏は、1990年代前半にインドネシア・西カリマンタン(ボルネオ島)のカリス人の社会でフィールドワークを行い、その時点では民族医療に関わる記述は行なったが、近代医療は人類学的実践の視野には入っていなかった[奥野2004]。しかしながら、その後起こった変化によって、カリス人社会において近代医療のプレゼンスは顕著なものとなり、「ローカルな実践のレベルを超えた近代医療のダイナミズム」を視野に入れずして、民族誌的記述もありえないという認識に達した。こうして、「研究対象社会における与件として扱われる近代医療のダイナミズムを検討すること、また、その上で、新たな装いのもとに、人類学のうちに、近代医療を含めた医療行動を観察するための道を開くこと(少なくともその準備をすること)が、本書の目的であった」(185ページ)と語られるのである。本書はその意味で、今後の研究プロジェクトのマニフェストという性格も有している。

このような問題意識に発する本書は、4つの章から構成される。それぞれの概要を以下に紹介することにしよう。

第1章「グローバル化する近代医療 帝国医療を手がかりとして」では、主に歴史学分野の研究蓄積が積み上げられてきた帝国医療に関する先行研究のサーベイが行われている。詳しい内容には立ち入らずに、このサーベイにおける著者の記述から受ける印象を述べるならば、A・ネグリとM・ハートの『帝国』やM・フーコーの「統治性」概念などの思想的な仕事からインスピレーションを得つつ、先行の帝国医療研究を整理している。要するに、近代医療としての帝国医療は、19世紀から20世紀前半にかけて西欧諸国の植民地を中心に「統治技術」として「世界拡張」したとされる。ここで著者が強調しているのは、2点である。第1点は、帝国医療が「統治技術」として導入されたという点である。これは、帝国医療の政治性を指している。第2点は、帝国医療のグローバル性である。

著者は、このような「帝国医療」概念を踏まえて、次のような課題が生まれるとする。「近代医療が世界的に拡張する中、地球上の各地域社会において、近代医療との関係の中で新たな実践や観念が紡ぎ出されている。近代医療が全域化する一方で、地域的な病気治し実践が周縁化されるだけでなく、それらが、近代医療を解釈し、取り込みながら生き延びているという現実が存在する。人類学は、近代医療の世界拡張のありようを十分に踏まえながら、医療実践のありようをめぐる民族誌技術を蓄積していくことになるだろう」(48ページ)。それだけではない。著者は、M・L・プラットの「コンタクトゾーン」という概念を借りながら、人類学独自の課題を設定する。コンタクトゾーンとは、「地理的・歴史的に離れていた人びとが、威圧、根源的な不平等、強固な衝突という状況を含みながら、お互いに接触し、進行中の関係を築き上げていくような、植民地的な遭遇の空間」(プラット)を指すのだが、近代医療

の世界拡張としての帝国医療を、上からの一方向の現象として捉えるのではなく、「近代医療の導入をめぐるグローバルとローカルの間でどのような相互交渉が行われてきたかを、民族誌記述の中で明らかにすること」(49ページ)が必要になる。

帝国医療をめぐる人類学の課題をこのように明示しつつ、著者は、第2章以降において各論を展開する。第2章「土着の実践から民族医療へ 過剰化する近代医療」において、取り扱われるのは、「民族医療」である。「民族医療」とは、人類学もしくは医療人類学が、調査地域の土着の医療実践(医療現象)を研究する分野である。しかしながら、著者は、W・H・R・リヴァーズ、E・H・アッカークネヒト、C・レヴィ=ストロースといった系譜をたどりつつ、20世紀前半に「民族医療」概念が定着する過程は、結局は帝国医療=近代医療が自らのモデルに基づいて土着の実践(現象)を解釈する過程に他ならなかったと指摘する。したがって、「民族医療」というカテゴリーそのものは「近代医療」と一対のものに他ならないという事実を改めて確認している。今日も、このような問題性は継続している。著者は、上田紀行氏がスリランカの悪魔祓いの儀礼に関して、「癒し」というキーワードを使いつつも、結局は「治療効果」を論じてしまったために近代医療の側に回収されてしまったと批判する。かかる状況に対して、著者が提案するのは、次のような作業である。「帝国医療以降、近代医療のグローバル化によって生み出された民族医療のカテゴリーの中に次第に書き込まれていった西洋近代側からの期待や思惑を整理し『ときほぐさ』なければならない。それは、土着の実践に対する西洋近代のまなざしの系譜を、その歴史的・社会的・政治的背景を含めて解読し、脱中心化することにほかならない」(102ページ)という。

第3章「帝国医療の実相を探る マラヤのラターをめぐる」では、第2章でも取り上げられていたラターという現象をめぐる、第2章で提案されたのとは反対のベクトルの作業が試みられている。すなわち、帝国医療の実践の中で生まれた言説の中に、現地社会の実相を探し出そうとする試みで

ある。ラターとは、「卑猥語を発する」、「他者の言葉を模倣する」、「他者の行動を反復する」、「他者の指示に自動的に応じる」といった、マレー半島などの現地人社会で見られる反応行動に名づけられた名称である。ラターは、19世紀から20世紀前半の植民地マラヤで医療行政官により観察され記録されたが、精神疾患の一種であるとして、医療の言葉で表現されるようになっていった。この意味で、まさに帝国医療の言説の中に位置付けられたのであるが、著者はこのような言説をつぶさに見るならば、現地の人びとの行動の中に、帝国医療＝近代医療の認識の枠組みでは捉えられないノイズのような記述に出遭えるとするのである。「近代（精神）医療は、ラターに関する情報を集積し、やがてそれを一方的に（精神）病理として読み解くようになった。そのような近代（精神）医療は、イギリス植民地政府によって、統治ツールとして植民地マラヤに導入されたものであった。植民地マラヤにおける帝国医療的な体制は、ラターに関するかぎり、ラター観察のそもそもの出発点において、異論や抵抗の可能性を内包する現地の人びとの行動とふるまいを抱え込んでいたのである」（124ページ）。

第4章「帝国医療の亡霊 サラワクのコンタクトゾーンから」は、マレーシア・サラワク州のブナン人を取り上げ、自らのフィールドワークに基づきつつ、帝国医療の現在を明らかにしようとする。森林の民であるブナン人たちは、外部からやってきた商業的な森林伐採の利害（木材企業）に対して、林道封鎖やNGOのインターネットといった手段を使って、対抗・交渉してきたと描かれている。その彼らが帝国医療＝近代医療とどのように関わることか。ここで著者は、一見奇妙な手法をとる。というのは、このブナン人たちの生活世界では、基本的には近代医療は「不在ないしは不十分」でしかない。したがって、「帝国医療研究が、植民地時代以降の近代医療の政治性を、とりわけ近代の側に立ちながら解剖するプロジェクトだとすれば、本章ではそれとは逆に、近代から遠く離れた辺境の側から、近代医療の不在ないしは不十分をめぐる交渉に焦点をあてることによって、近代医療を追究することになる」（142

ページ）。この引用からもわかるように、この章では、実は帝国医療＝近代医療そのものはほとんど扱われていない。むしろ、近代医療の不在をめぐるブナン人内部の対立状況、あるいは新薬開発に関わって森林の生物資源に関わる利害状況などが論じられている。

以上、本書の内容を比較的忠実に紹介してきた。本書が、新たな問題設定によって書かれた作品である以上、このような手続きは必要であろう。ここから先では、本書について評者なりの視角から一定の論評を加えることにしたい。評者なりの視角と言ったが、帝国医療研究に一定程度携わってきた歴史研究者としてのものであることを断っておきたい。

第1は、「帝国医療」というキーワードを現代の課題に対するアクチュアルな方法概念として提起しようとする著者の試みへの評価である。本書の中で「帝国医療」という言葉が、歴史的な事象への言及を除くと、あくまでも「近代医療」そのもののメタファーとして使われていることに気づく。こうした用法は、意外なほど違和感を覚えなかったことを指摘しておきたい。その意味で、本書の試みはかなり成功していると言えるであろう。現代の「グローバル化」の一層の進展の中で、世界の諸地域における人びとの身体をめぐる状況は、さらに「医療化」（medicalization）の度合いを強めていることはもはや否定できない。したがって、フーコーが創始した「統治性」概念をもち出すまでもなく、「帝国医療」という言葉が現代の状況を照射するある種のメタファーとして機能しうることを、本書は証明したと言える。

第2は、歴史的な事象としての「帝国医療」の研究に、人類学はどのような貢献をなしうるのかという点に関わっている。本書で提案されている方法のひとつは、「民族医療」への論及（第2章）の際に示されたように、学の体系に内在する西欧性（近代性）を抽出することである。これは、サイド以来のポストコロナル批判を通過した後、ある意味で

当然の問題意識であろう。これは、人類学のみならず歴史学がこの十数年にわたって意を用いてきた点である。より興味深いのは、もうひとつの方法の提案である。本書の第3章ではその一端が示されているに過ぎないが、帝国医療の当事者たちの残した言説の中に逆に現地人の行動の実相を探るという試みである。これは条件付きで歴史研究者の側も首肯しうる試みである。その条件というのは、一定数の史料の収集と史料批判という手続きを指している。読み込みと解釈の恣意性を避けるためには、ラターをめぐる史料を、より幅広く収集し、慎重に分析する必要があるのではなかろうか。ただし、フィールドワークの体験が豊富な人類学者の感性と直感が大きく生きる読みというものがあろうことを認めるには吝かではない。

第3は、人類学として本領を發揮すべきフィールドワークに基づく章が提示している問題に関わっている。本書を通じて理解しえたことは、人類学の現在がポストコロナル批判を経て、「コンタクトゾーン」という方法概念に示されていたように、相互交渉の局面を重視するようになってきている点である。既に見たように、第4章では近代医療の不在の状況の中で、ブナン人たちが近代医療を待望する様相が描かれている。これは、「帝国医療」というメタファーがどの程度活きるのかという問題にも関わっている。20世紀後半もしくは21世紀初頭における帝国医療=近代医療は、上(もしくは外)からの一方的な導入・浸透ではなく、むしろその「不在」が下(もしくは内)から問題化されるという局面を迎えているということを示している。とするならば、「帝国医療」というメタファーを、今日のグローバル化状況に当てはめる場合に、もうひとつ踏み込んだ概念化が必要であることを意味しているのではな

かろうか。現代の国際保健医療にも射程を及ぼして、「帝国医療」というキーワードを使用する場合、明らかに19世紀および20世紀前半の状況との弁別を必要としている。

このことに関連して、本書の問題提起がどのように受けとめられうるのかという点について、最後にふれておきたい。2004年2月に京都で「熱帯医学と地域研究 知の実践と構築」と題するシンポジウム^(注1)が行われた。その時の仕掛け人の一人が本書の著者の奥野氏であったが、想起されるのは、このとき奥野氏が提出した「帝国医療」というタームに、熱帯医学や国際保健医療に従事する医学関係者の諸氏が殊のほか反発を示したという一事である。「帝国医療」という問題提起的な用語が、人類学をはじめとする社会科学を活性化する作用を果たしうることが確かであるとしても、さらに本丸である医学界に配達される郵便物となるためには、もう一段レトリックを彫琢する必要があるのではないだろうか。

(注1) このときのシンポジウムの成果の一部は、『地域研究: JCAS Review』第7巻第2号(2006年)に特集「グローバル化する近代医療」として掲載されている。

文献リスト

- 池田光穂 2003. 「帝国医療の予感 その修辞上の戦略」『九州人類学会報』第30号.
- 奥野克巳 2004. 『「精霊の仕業」と「人の仕業」 ボルネオ島カリス社会における災い解釈と対処法』春風社 2004年.

(大阪市立大学大学院経済学研究科教授)